

宝暦7年の信濃川洪水による被害

この絵図（「蔵王村川欠絵図」）は、宝暦7年（1757）に発生した信濃川の大洪水で、古志郡蔵王村（現長岡市蔵王）の田畑が水没した状況を描いたものである。役所へ被害状況を報告するために作成した図と思われる。

宝暦年間には凶作や洪水の続いた時期であった。宝暦3年から同5年にかけて干ばつや冷害などの天候不順が続き、越後の全域が飢饉となった。また、信濃川の流域では、宝暦6年6月の大洪水に続いて、翌7年にも各地で土手が決壊し、耕地や村々が飲み込まれた。とりわけ、宝暦7年には5月から数回にわたって関東・会津・北国筋・東海道筋など、広い地域が洪水に襲われた。

前代未聞といわれたこの年の信濃川の洪水を、長岡に残る記録から紹介しよう。まず、長岡藩では5月2日と5月28日の2回の洪水で、高7万5200石の耕地が被害を受けた。そこで、被災地の畑作農家には大豆の種子代を貸し与え、田地には稗を蒔かせた。同時に被害状況を幕府に報告し、年末に7000両を借りた（『牧野家譜』）。

また、十日町村の専福寺住職が書き残した『諸事見聞雑記』には「4月晦日から5月5日まで昼夜雨が降り続いた。そのために、5月1日から大水となり、6日間も水が引かなかった。天神村では家も寺も流失し、西野村でも家が1軒つぶれた。ついで、5月24日から6月3日まで雨が降り続き、浦柄村の橋が流失した」とある。6月20日、8月上旬にも高さ1丈（3尺）を越す洪水が追い打ちをかけ、西野村は信濃川の西側に移転したという。

さらに、郡奉行の武山勘助は、5月の被害を次のように記している（『越の寄ふみ』）。

4月26日から豪雨が続き、5月1日の夕方から信濃川が増水し始めた。2日の明け方から近在の村々が次々に大川や用水路の土手が切れそうだと報告してきた。村々の者だけでは防ぎきれないので、長岡町の男も総動員して、信濃川右岸の草生津村・新町村の堤防を守らせた。

5月3日の朝には長岡町の者を引き取らせたが、草生津村の家々は床上浸水して、2階や屋根で過ごす者がいた。3日の夕方に船4艘を出してこれらの者を救い出し、8日まで藩の御蔵に避難させた。家に残った者には船で握り飯を配った。

草生津村では全戸の39軒が床上浸水し、家財の大半が流失、溺死34人であった。隣の左近村でも男女9人と馬2匹が行方不明となり、城下の下流では川沿いの村々で流失家屋45軒、溺死52人という被害を受けた。流失を免れた米や味噌も泥まみれとなり、袖乞いに出る者も少なくなかったという。

このような大水害に備えて、長岡藩は城下の町に用心船を常備させ、村々に土手の補強を命じた。しかし、川の流れが大きく移動したり、対岸の村々が被害を受けるなどして、対策に苦勞した。さて、蔵王村の浸水場所は、信濃川が中州の間を幾筋にも分かれて南（左側）から北（右側）に流れ、東（下側）から柿川が合流する地点にある。低い中州などに開かれた耕地だけが水没し、柿川の北側に位置する蔵王権現の社殿や、南側の中島の中心部は浸水を免れている。開発の進行とともに、被害は広がったことになる。

なお、蔵王村は江戸・上野の寛永寺に所属する蔵王権現の所領であり、中世から信濃川の河港に立地する霊場として栄えた。17世紀の初めには堀氏の城下町となったが信濃川の侵食で手狭となり、城郭は隣接する長岡に移された。

絵図の右下を見ると、鳥居と仁王門をくぐって直進した場所に、堀に囲まれて蔵王権現の社殿が建つ。その左側には堀に囲まれて「大寺」と記された別当の安禅寺が見える。この堀は城郭の名残である。また、蔵王権現の社殿も過去の洪水で数回の移転を繰り返している。



藏王村川欠絵図／小川襄氏藏

